

思春期・青春危機における老婆イメージと「悪・性」

今井 皖式

要 約

亡き祖母の父性的精神像である霊に取り付かれた女子の変容過程と魔女の魔法によって老婆の姿に変えられた「ハウルの動く城」のヒロインであるソフィーの変容過程とを比較した。

思春期危機は変容のための危機である。思春期の女子は親から守られなければならない。

しかし、母親との結びつきが弱い女子は完全な女性像である老婆と出会う必要がある。彼等は老婆の守りの中で悲しみや怒りを体験し、大人の女性へと変容するのである。

キーワード：姥皮、テメノス、変容

(1) はじめに

グリム童話や日本昔話には思春期・青春から大人へと変容する普遍的な過程が描かれている物語が少なからず存在し、かつての人々は昔話を生きる為の支え・指針としていた。しかし現代人はその物語の持つ意味を受け止める意識状態ではない。

しかし、一方では多くの若者や子ども連れの大人たちがジョージ・ルーカスの映画やジブリの映画アニメを見て感動する現象が示すように、現代人にとっては映画やドラマが昔話の代替物になっていると言っても過言ではないだろう。なぜなら、「Jung and Film」¹⁾に概括されているように、映画にはシンボリック表現が含まれ、人間にとっての普遍的なテーマが描かれることが多く、かつての昔話が内に有していたのと同様の影響力を持つからである。

ところで、ジブリの作品の内、近年、特に多くの若者を感動させ、支持されたのが「千と千尋の神隠し」²⁾であり「ハウルの動く城」³⁾であった。

この二つの作品の共通点は老婆が重要な位置

を占めているということである。これらの作品が若者を感動させたということは、現代の若者に対して老婆（老人）像がある種の影響力を及ぼしているのではないかと推測されるのである。

最近、娘が父親の首を斧で切断する事件が起きて、世間を驚かせた。父親の首を切断することの象徴的意味としては、父親を批判しその男性性を去勢し、父親を乗り越えようとする行為であり、また父親から植え付けられた規範からの脱却であると考えられる。しかし、父を悪の代表者とみなし、その性を嫌悪する心の深層には、親の態度の多面性を統合することの問題とは別に、思春期・青春の若者がどうしても通らなければいけない根源的な悪と性の問題が存在しているように思う。

父親を殺害したり、根源的悪や性の事柄との葛藤はそれを外在化するのではなく、本来的には若者が心の中のみで為さねばいけない心理的な仕事なのである。

しかし、心の中のみで行う為には、その若者を見守る環境が必要である。見守りが薄いと内的に象徴的に行うべき行為を外的に現実的に行動してしまいかねない。かつては若者を見守る先輩や大

人たちが身近なところに存在した。しかし、現代は若者を見守る環境が薄くなったばかりか、周囲の大人は若者が大人へと変容するための苦しい心的課題に取り組んでいるということすら気づいていないのではないかと思える。

親の守りが弱いと、若者は祖母・祖父イメージとダイレクトに結びつくが、祖母・祖父イメージは強大で、その影響力は親イメージよりはるかに勝る。忙しい両親の代わりに自分を育ててくれた祖母が亡くなってから精神的に不調をきたし、犯罪事件を起こす若者が時々現れるのもこの故であるだろう。

以上のことから、思春期・青春危機における老婆イメージの果たす役割と「悪・性」について、主として映画アニメ「ハウルの動く城」と重大な思春期危機を乗り越えたある女子生徒の夢を比較しつつ考察したい。なお、プライバシー保護の観点から、本人を特定できないように六つの夢のみを提示し、クライアントについての言及も最小限にし、且つ変更を加えている。

（２）父の娘と薄い母親の守り

ある15歳の女子中学生（以下クライアント）が「頭がぼんやりして、自分の後ろに人がいる。骸骨の夢を見るので怖い」と訴えて、心療内科クリニックにやってきた。クライアントの母親もある種の心理的な問題を抱え、母親はクライアントを産んだ後もクライアントの世話を祖母（父方）に任せた。父親は仕事一筋の滅私奉公タイプで家庭内のことや子どもの教育についてはほとんど口を出さなかったが、自分を捨てることの大切さをよく口にしていたという。休みの時などはクライアントとよく遊んでくれたので、クライアントは母親よりも父親が好きで、クライアントは自分を捨てることに喜びを感じて生活してきた。弟とは殆ど関係なく過し、一人っ子が家に二人いるようなものであった。

クライアントはいわば「父親の娘」である。「ハウルの動く城」のヒロインであるソフィーは「お父さんの店だから」という理由のみで、父の店である帽子屋を父が亡くなった後も営み

続けている。帽子というのはこれまで取り入れてきた社会的集合意識であり、考え方、原理・原則を表すがゆえに、ソフィーもまた父の考え方を受け継ぎ、その価値観のもとで生き続けようとする、「父の娘」である。

ソフィーは少し時代遅れのねずみ色の服を着て、帽子を深く被り、長い髪の毛を三つ編みにした化粧気のない女性で、紅色の服を着て、化粧した女性っぽい妹のベティとは対象的である。その妹から「お姉ちゃんは本当に帽子屋になりたいの」と問われても、「それはー」と返答できないので、妹からは「自分のことは自分で決めないとだめよ」と言われる。

このことは、ソフィーが本来の自分と繋がりを持たないといけない時期に来ていたということを示しており、ハウルはソフィーが本来の自分と繋がるための架け橋となるべき男性像であると考えられる。それ故、見知らぬ兵士からねずみちゃんと揶揄され、つきまとわれかけたところを助けてもらったハウルにソフィーは一目ぼれする。

しかしこのことは、女性性を抑圧してきたソフィーにとってその女性性が開花する機会がやってきたということでもあり、それは身をほろぼしかねない危険なことでもある。

一方ハウルは黒いものに付きまとわれ、それを避けるように空を飛ぶ。黒色は憂鬱感、抑うつ感、そして人間にとっての根源的な悪を意味し、その問題を避けるために空を飛ぶ。ハウルはソフィーの無意識的人格のある部分の表現でもある。

クライアントとソフィーは自分の背後（無意識）に存在する根源的悪（骸骨）の問題とエロスの問題に脅かされているのである。

（３）祖母の霊と婆皮を着た娘

夢1「骸骨の歯の音がすると、黒装束で侍姿の骸骨の集団が家に押し入り、私を刀で切りきざむ」。

クライアントは意識を失ったかと思うと、「今私の後ろにもう一人いる」と話し、しばらくして意識を取り戻した後、筆者に「助けてほしい」と訴える。

(クライアントの連想) 私は祖母に育ててもらったが、1歳の時に弟が生まれ、その時、祖母から「あんたはしっかりしないかんよ」と言われ、祖母からおしめを替えてもらいながら、私はお漏らししたらあかん、手を掛けてもらったらあかんと思った。それで家族からは「手がかからなくて良い子やね」と言われて放っておかれた。祖母は目で注意する人で私は祖母の目を恐れ、祖母の目ばかり見て暮らしてきた。祖母が倒れて亡くなったお通夜の日、私の寝ている後ろに祖母があらわれ「これからも私が側にいるから泣きなや」と言った。それ以後これまでの約1年間、私の右上に常に祖母が現れ、私の言葉使いから全てにわたって注意してきた。

過度に良い子を期待され、最高の徳を生きざるを得なかったクライアントはその反面である人間の根源的な悪(骸骨)の問題に触れただけでなく、その骸骨に切り刻まれている。骸骨はまた感情を切り捨ててしまったクライアントの否定的批判力(否定的アニムス)でもある。

グリム「まっしろ白鳥」⁴⁾では否定的アニムスが「貧乏人のすがたで、ほうぼうの戸口へ行って、物乞いしては、美しい女の子をつかまえる」盗賊の姿で現れ、見るなの禁を破った娘の頭や手足をばらばらに切り落とし、たらいの中にいれてしまう。

アニムスの否定的な働きについて、先駆的に研究したエンマ・ユング⁵⁾は次のように述べている。

アニムスの特徴の一つのあらわれ方は、形態としてではなく言葉として現れることである(ロゴスはむしろ言葉の意味である)。すなわち、ありうるすべての状況を解説したり、あるいはそれに対する態度のあり方を指示する声として現れる。この形式においてしばしば、アニムスは一つの人格的形姿に結晶するよりずっと前に、先ず自我と異なる或るものとして知覚される。私が観察したかぎりこの声は主に二種類の調子であられる。一つは、あらゆる活動への批判的で、大ていは

否定的な評価、あらゆるモチーフや考えの厳格な吟味としてあらわれる。それはいつも劣等感の原因となり、自己表出へのどんな自発性も願望も芽のうちに窒息させてしまう。ときには、これが度はずれた賞賛にかわることもある。そしてこういう極端な評価の結果、完全な虚無の意識と高まった自我感情や価値感情との間を、振り子のように行ったり来たりさせられることになる。

否定的アニムスは老松⁶⁾も述べるように、融通の利かない意見や因習的道德にもとづく規範を押し付け、個別的な状況を考慮しないで他者を冷ややかに批判する声として姿を現し、ビルクホイザー・オエリ⁷⁾が、女性の否定的アニムスを悪魔と同レベルのものであるとし、個人的なことを超えた集合的なことであるので、アニムスに取りつかれた女性は元型的な力が働き、破壊的になると考察するように、クライアントの心の中の破壊的なアニムスは他者を冷たく批判するだけでなく、自分自身をもお前はだめな人間だと切り刻んでいる。

クライアントは根源的悪の問題にも取り付かれているが、この状況はグリム童話「トルーデさん」⁸⁾の主人公の少女が好奇心のままに魔女のところに行き、魔女のありのままの姿を見たことをあからさまに魔女に伝えたので、魔女に火の中に投げ入れられてしまうことと類似しており、フォンフランツ⁹⁾も述べるように、クライアントが他者の冷酷な残忍さを深くのぞきこまないようにする為の治療者側の工夫が必要となる。

クライアントの否定的アニムスは父親から、そしてその母である祖母から受け継いだものである。母親に子どもを暖める力がなく、父親も子どもを守らないとすれば、唯一の頼るべき相手としての厳格な祖母の目に従わざるをえないのは当然であり、また祖母の目があったからこそこれまで過すことができたとも言える。しかし、その否定的アニムスは祖母の目としてクライアントを批判し、無価値な人間だと切り刻む。祖母の目は彼女を守ると同時に責めさいなむという両面を持っている存在と言える。

亡くなった後にクライアントの背後に現れる祖母はポルターガイストでもある。ポルターガイストとは、死亡したにもかかわらず、この世に気がかりなことがあり、生きた人や物に取り付く霊のことである。

ステファニー・デメトラコポウルス¹⁰⁾によれば、

思春期には、人格のさまざまな側面が一度に顕れ出ようとあがき、しかもそれらが互いに矛盾しあうことが多いため、ポルターガイストは特に思春期の人間にとりつきやすい。・・・ポルターガイストは大体、否定的で破壊的な霊である。人間を取り巻き、人間の肯定的側面を通して高貴で善なる力を発揮するとされる霊とは逆の存在である。

クライアントの背後に現れた祖母の目が持つ両側面の意味をよく言い表している説明である。

「ハウルの動く城」では荒地の魔女に魔法をかけられたソフィーは老婆の姿になる。老婆は女性像の最も普遍的で確固たる女性像で、「対立を統一して、不安と攻撃を正しく関係づける自己」¹¹⁾である。女性性の問題を抱えるソフィーはタイプの違う母親との関係は薄かったことが想像されるので、確固たる女性像の仮面を被ることになったと推測される。

「魔女の宅急便」¹²⁾の主人公キキは、修行のために見知らぬ町で一人で過す旅に出るときに、母親から空を飛ぶために母親の箒をもらう。箒は母親の守りを意味するが、女性は大人になって、結婚し、子どもを産んで育てるとき、家の雰囲気、台所の片付け方、子育ての仕方が驚くほど自分の母親に似ていることが多い。キキが母親から箒をもらっているのと同様のことなのだろう。ロシアの民話「うつくしいワシリッサ」¹³⁾では主人公の娘ワシリッサが、母親が亡くなる前に母親から人形を与えられ、継母から多くの仕事を与えられても、その人形が夜のうちに仕事を片付けてくれる。このことをフォンフランツ¹⁴⁾は「母親のよりいっそう深い本質の心像が、少女のもとにとどまる」と解説している。キキもある意味で人格の中心を母

親から受け継いでいるということが言える。

しかし、母子関係の問題を抱えた女性は、キキのように母親をモデルにして大人になるという一般的な成長過程を経ることが困難なので、織田¹⁵⁾が述べるように、「普遍神話のなかの老女」に出会わなければならなくなり、ソフィーと同様の人生を歩むのである。

織田は次のように述べている。

母子関係の守りが薄かった女性は親をモデルにして大人の女性になるという、普遍的なパターン（神話、つまり普遍的神話）を生きたことが困難になる。ここに、クライアント個人の生き方（個人神話）と普遍神話との断絶を見ることができる。この断絶を癒すためには個人神話としての母親を基礎づけている、普遍神話のなかの「老女」に出会わなければならない。

ユングは無意識を個人的無意識と普遍的無意識との二層を考え、普遍的無意識は夢、昔話、神話等に表現されとしているが、織田の述べる普遍的神話のなかの老女とは昔話や神話のなかに見られる老女であり、現代では小説や映画、アニメのなかに見られる老婆である。このことを山中¹⁶⁾は「神話的世界との交流は無意識下でしかおこらなくて・・・それは、映画や物語を通して、人間の根源的なものに触れた時にふと感ずることができる世界なのです」と具体的に説明している。

「千と千尋の神隠し」では、千尋は豚になった両親から離れて、異界の湯婆婆のもとで働き、銭婆に助けられる。千尋の両親もまた、子どもの不安感に気づかず、食欲を満たすために常識的行動を逸脱し、娘の千尋を守る力を弱めている。それゆえ山中¹⁷⁾が述べるように、「前思春期という人間の到達する最深部、もしくは最高部に達してしまうような時期」に千尋は普遍的無意識の層を支配する老婆の両面（湯婆婆と銭婆）と出会ったのである。「ハウルの動く城」でソフィーに魔法をかけて老婆の姿に変えた荒地の魔女は老婆の否定的側面の現れと言える。

クリスアーネルツ¹⁸⁾が述べるように、自分の存在に自信が持てず、劣等感が強い場合は、祖父母を偉大だと空想し、不満足感のためにその強さにしがみつかずにはいられない。それ故、親の存在感の弱い子どもは祖父母と同一化したいという願望を抱く。特に自我の弱い子どもは英雄像を求め、祖父母にあこがれる。

前思春期は「性を受け入れる前の最もピュアな時期」¹⁹⁾であり、「思春期が訪れる一歩手前、性の衝動が動きはじめ、それと取り組むことによって大きい変化が生じる以前に、子どもとしての完成に達する」²⁰⁾時期であるとすれば、思春期・青春期は性を受け入れざるを得ない時期であり、親の守りが弱いマッチ売りの少女が寒さをこらえるためにマッチを擦るイメージが、異性との性的な関係を結ぶことを連想させるように、親の守りの弱い娘は性に一気にさらされることになりかねない。

このような時期に、娘は姥皮（日本昔話）を着ることで、本能的性にさらされることから守られる。それは前思春期の少女が熊の皮を着て、「ベルゼルガーつき」といわれて、乱暴で男っぽい行動を取ることで同様の意味がある。

「アモールとプシケー」²¹⁾の物語では、怪獣の姿の背後に存在するアモールの本質的部分を見た瞬間に、アモールはいなくなり、それ以後プシケーはアモールを探す旅に出るのであるが、その間にプシケーは内的には密かに性的ディオニューソスに出会い、性的側面を育てた。韓国ドラマ「冬のソナタ」²²⁾のユジンも高校生時代にチュンサンと出会い、チュンサンを見失い再び出会うまでに内的にはデュオニューソスに出会い、性的側面を育てたと考えられる。

以上のことからすると、ソフィーは姥皮を着て、性に一気にさらされることから自分を守り、婆皮のなかでゆっくりそれを育てるのだと言える。

そして、老松²³⁾が「そこには、自然、身体、情動、本能をどう扱うのかという難しい問題が含まれている。同時に、伝統的な女性像とこれからの女性像との強い葛藤をも顕在化」すると述べるように、ソフィー自身も、父権的な考え

方のもとで、老婆で表される伝統的女性像に飲み込まれ、取り付かれ（取り付かれるということとはすなわち魔法にかかるということである）たが、新しい男性像との関係を形成し、これまでとは違った女性像を確立することにより、老婆の顔（姥皮）から若い女性の顔になることができるのである。

（４）傷つく者が癒す

夢２「何人もの私が先生を刺し殺す。私は泣き、もう一人の私は笑う。上の方で私が場面をじっと見ている」

（連想）死のうと思って薬を飲んだ。最後の味方が先生なのに、先生はのんびりしていて、それで怒りをぶつけた。私を助けてくれる？口が悪くて意地悪で、それがもう一人の私。同時に二人の自分がぶつぶつ話しているみたい。

治療者である筆者を殺したことで、初めて攻撃性を表出した。クライアントが抑圧してきたもう一人の影の側面が動きだしたと言える。

クライアントの絶望感、恐怖感は相当のものだったはずである。この絶望感には幼いころから親から見捨てられてきたことの深い怒りがまじっている。深い絶望感と怒りを筆者にぶつけ、筆者に見捨てられないかどうかを試しているのである。

日本の昔話「蛇婿入り」²⁴⁾は、父親を助けるために蛇と結婚した娘がその蛇を針で殺害した後、家を出て、ばあ様から山中で与えられたおんばの皮を被り、長者の家で下働きとして奉公し、長者の長男に見初められ結婚するという物語である。

夢１でクライアントの攻撃性が自分自身を責め、切り刻み、夢２では筆者に大蛇を投影し、刺殺している。「蛇婿入り」で娘が大蛇を殺害した後、家を出て老婆と出会っていることについて、怒る女性を生きたからこそ娘は老婆からおんばの皮を与えられたと織田²⁵⁾（昔話と夢分析）が説いているように、筆者はクライアントの破壊性・攻撃性の積極的な意味を汲み取り、

それに対処することに心をくだき、同時に、攻撃されることに於ける筆者自身の傷つきとそれにとまなう怒りを注視した。

マイヤー²⁶⁾はイザヤ書²⁷⁾「光りを造り、闇を創造し、平和をもたらし、災いを創造する者。私が主、これらのことをするものである」を引用し、「これと同じことはアポロンにも、バロックにも、バロック時代までのキリスト教の神にさえあてはまる。諸々の彫刻の中で、神は弓と矢を持って疫病を送っている姿で描かれている。また、古代には、自分自身が病んでいるか傷ついている治療神がある。」と述べ、いわゆる「傷つく癒し人」という治療者像を提唱し、心理療法は心理療法家がクライアントと同じ心的状態を経験し、なおかつクライアントよりも安定した人格を保つことであり、重要なことはクライアントの病を心理療法家が荷うことであると主張している。

グッゲンビュールクレイグ²⁸⁾はマイヤーの考えをさらに深化させ、“治療者—患者元型”を仮定した。

筆者はすでに「夢とおとぎ話しにおける母親援助の実際」²⁹⁾でこの治療者—患者元型について言及している。それを要約すれば、心理療法関係において、治療者が自身の健康な面のみを意識していると、クライアントは自身の病んでいる面のみを意識させられることになる。クライアントは自分のなかの健康で、自分自身を癒す力を働かせることによって、病気を治し、成長することができるが、治療者が自身の病んでいる側面をクライアントに投影すれば、クライアントはますます病んでいる側面を増大させる。それゆえ、治療者は自分自身の傷ついた部分を他者に投影するのではなく、あくまでも自分自身のこととして見つめ、クライアントの心の中にある自分を癒し、成長させる力が働くのを待つという態度を取らなければいけないということである。

「傷つく癒し人」についてユングが好んで用いる「雨乞い師」³⁰⁾の話では、雨乞い師は秩序の乱れた地域に入ることによって自分自身の秩序が乱れたということを自覚し、その秩序が戻るための工夫をしている。

筆者はクライアントから夢の中とはいえ殺されてしまった。それは腹だたしいことであり、傷つきもした。筆者はそれを明確に自覚することで、心理的安定を保ちつつ、クライアントが攻撃性、怒り、恨みを表現することの大切さに思いをはせた。

(5) テメノスとウロボロス

夢3「私は真ん中でしゃがみ、先生と私の肉のついた骸骨がかごめかごめをする。」

夢4「肉のついた骸骨がアメリカ軍機に、首だけの私は日本軍機に乗り、銃撃戦になる。私は負けて下に落ち、肉が飛び散る。」

(連想) 最近他人の悪い面を考えて、それが自分にもあると思うと落ち込む。頭の中にくっつかの考えがあつて、それがぐしゃっと一緒になったときにおかしくなる。

私は祖母から裏表のある人間になりなさんと言われてきた。私は陰口を言ったことがない。私は目で人の悪いところを気につけることが身についた。最近、私は家族、特に母にひどい言葉を言っているらしい。腹が立つと、言っではいけないと思うのに言っではまっている。口が動いているのでしゃべっているということは分かっているが、何を言っているのか分からない。私が母にきつくあたると、父は母に「娘を殺せ」と言う。私はそれで弟に八つ当たりをし、弟を私はなぐる。だから、アメリカ軍機は父や母であつたりする。私は裏表があるようになった。それはいやだけど、気持ちは楽になった。他人の気持ちはすぐに読み取れるが、母親の気持ちは読み取れないので、必死になって顔を見て話している。

夢のなかの「かごめかごめ」は円形である。円は聖域であり、ウロボロスでもある。

円形の聖域(テメノス)で有名なのは、キリスト教の迷宮である。

「元型と象徴の辞典」³¹⁾には次のように説明されている。

シャルトルにある迷宮は、誰もが迷路で迷ってしまうので、教会の東の端に位置する主祭壇に直接近づくことがないようにしている。迷宮（十一個の同心円に相当するもの）の道の上に十字架が載せられている。この迷宮は、そこに立ち寄るキリスト教徒の罪の世界の道を天上すなわちエルサレムへの道に変化させる機会を提供する」（アーキタイプの解釈）「迷宮は古代のシンボルであり、有史以前の民族の洞窟壁画にもみられる。これは、外の目に見えるものから中の目に見えないものへの移行を、そしてもちろん回帰への可能性も象徴している。この旅は子宮への回帰、下界へと落ちること、世界の中心への旅とみなされるかもしれない。この旅はしばしば入会の儀式、つまり入門するものの精神的変化を引き起こす試練と関係している。

以上の説明のように、円形の聖域は人格変容の機会を与える場なのである。

ところで前章で、クライアントの夢からは絶望感と恐怖感を感じると筆者は述べた。筆者は30歳のころからユング派分析家ジェームス・ヒルマンに傾倒し、チューリッヒやニューヨークに於ける彼の集中講義を聴き、それを参考にして心理療法を行ってきた。そして、その講義の中で、このような絶望感や恐怖感を抱くクライアントに対して、心理療法家は羽を休める場所を提供するという態度を取ることが大切であると彼はしばしば説き、私はこのクライアントに対しても、心理療法の場がテメノスであり、安らぎを得ることのできる場であるとクライアントが感じることができるようという態度をとり続けた。

ジェームスヒルマン³²⁾はテメノスについて次のように述べている。

恐怖が存在する限りは、カウンセリング空間は、寺院の聖堂、テメノス（神殿の聖域）、恐怖からの避難所を与える寛容な聖域とみなすのが最善であろう。能動的な愛は、恐怖から救い出すことができないが、一方静けさと冷たさと暗さと忍耐は、夜が過ぎるまで隠れているための洞窟を提供するだろう。

祖母が亡くなった後のクライアントは家族との感情的なつながりがなく、孤独である。フォンフランツ³³⁾は孤独は悪の諸力に扉を開くので、他者とのつながりを持たない場所では自分の周りにおまじないのまんだらを描く必要があるとして、次のように述べている。

それは地平線の四つの方向への祈りでもよいし、牧草地の方に円くなるように祈りを送ってもよいし、円のジェスチュアをするでもよい。こういう儀式的なお守りの方法を知らなければ、自然の中で一人で暮らすことはできない。それは確実に人を捕らえてしまう。だから輪が必要なのである。少なくとも最小のもの、つまり身の回りにある自分のものがなければならない。

クライアントの夢に現れたかごめかごめの円は悪の諸力に扉を開き、他者の悪をあばき、それを指摘する危険性から自分自身を守るための円でもあったのである。

ウロボロスは自らの尾をくわえて円形になっている蛇とか竜で表現される。スウエーデンのアルチュナにある石に描かれた絵「世界蛇を捕えるツール」に関して、「元型と象徴の辞典」³⁴⁾には、次のように説明されている。

ツール神がボートに乗って、釣り糸にかかったとぐろを巻いている世界蛇と格闘している姿が描かれている。北欧神話における世界蛇は「ドラゴンとして知られる神話上の生きものの分類に属する。ドラゴンという語源は蛇を暗示している。というのはギリシャ語のドラゴンは、本物の蛇だけでなく神話の蛇ないし蛇に似た生物の両方を指している。さらにはドラゴンは事物の始まりと終わりにも関連がある。つまり、ドラゴンは天地創造と世界の終末と結びついている。多くの神話では世界秩序は宇宙的ドラゴンを打ち負かした後に生じる。同様にドラゴンの力の復活が前宇宙的状态への回帰を示す。

以上の説明からも理解できるように、ウロボロスは始原の混沌を表し、全てのことがそこで満たされる楽園状態にあることを示すが、一方では蛇を打ち負かすことにより成長するということを暗示している。

錬金術ではその作業（オプス）を円環であり、第一質量と同一視している。ユング「心理学と錬金術」³⁵⁾によれば、

錬金術師たちは作業は一なるものより生じ一なるものに還るのであって、いわば円循環のごときのものであると再三再四語っているが、この円循環はまさしくみずからの尾を咬む龍に他ならない。それゆえ作業（オプス）はしばしば「円形の」という形容詞を冠せられたり、「輪」と呼ばれたりするのである。……メリクリウスは「第一質量」であり、龍として己れ自身を呑み込み、そして龍として死に、石（ラピス）となって蘇生する。……メリクリウスは金属であるが同時に液体でもあり、物質であるが同時に霊でもあり、冷たいが同時に火と燃え、毒であるが同時に妙薬でもあり、諸対立を一つに結びつける対立物の合一の象徴なのである。

ユングの説明にあるように、ウロボロスとは最高の価値が生み出される場であり、根源的な悪や罪と関係する場でもある。

クライアントの夢では、骸骨に肉という生の感情が付着してきた。後ろの正面だあれとクライアントと筆者が後ろの正面にいる人物を探求している。クライアントは影の側面を探すと同時に、厳しく監視する目の正体を見極めようとしている。後ろから監視していた目は祖母が乗り移った自分の目でもあった。クライアントは悪い側面を極端に抑圧し、それを他人のなかに見出すことで、自分を高めていたのである。

しかし、考えることと感情はまだ分離している。クライアントにとって生の感情は敵である。しかし、厳しい監視の目の正体が分かりかけることにより、その力が弱まったのか、影の側面が動きだし、その部分の存在をも受け入れている。

最初に治療者を攻撃し、次に母親そして弟を攻撃するという形で順々に関係を深めつつある。人間関係はきれいな側面だけでは深まらない。影の側面を共有することにより信頼関係もでき、安心感も生まれる。

錬金術の第一番目の課題は第一質量を見つけることである。第一質量についてエディンガー³⁶⁾は次のように説明している。

内的には多大なる価値を有するとはいえ、第一質量には、外見上は汚い姿をしているので、軽蔑され、拒絶され、肥溜めに放り込まれる。心理学的には第一質料は影に、すなわち人格の最も劣っている部分に見つけられる、ということを意味する。これらの、自分自身の最も痛い部分、もっとも恥ずかしい部分こそまさに、話題にして取り組むべき部分なのである。

クライアントはウロボロスの円の中で、自分自身の最も恥ずかしい影的側面に出会っているのである。

老婆の姿になった「ハウルの動く城」のソフィーが家を出て、まず出会ったのが、道端で放っておかれた案山子であった。案山子は見捨てられており、また世の中では低いところに位地するものである。河合³⁷⁾が「一般にはあまり評価されていない者たちが良く知っている」と説明するように、変容は人格の劣等な部分からやってくるのである。

案山子はまた魂の導き手（プシコポンポス）でもある。案山子は最後の部分で好きなソフィーにキスされることにより魔法が解け、隣の国の王子の姿に戻ることができることからして、案山子はエロス機能の象徴である。いうならば、ソフィーはエロス機能を劣等な地位に貶めていたと言える。

また原作³⁸⁾ではソフィーは長女で、出世することをあきらめ、金持ちになり出世しようとする妹たちの後押しをし、妹たちの身の世話をすることで満足しており、そこには妬み心が欠如しているように思える。すなわち、ソフィーは嫉妬心、所有欲、エロス機能を置き去りにして

いたと言える。

ハウルの城はウロボロスの自己充足する為の城だと考えられる。退行し、傷ついた自己をケアするためのウロボロスの城であり、完全性の芽と悪をも含んだ城である。四つの扉があるのも完全性との関係であろう。その四つの扉は四つの心の窓があることを示し、その窓（扉）と接する風景はそれぞれ違っている。

「元型と象徴の辞典」³⁹⁾によれば、

サンチにある大きなスーパーは、まわりを巡回する道と四つの門を配しており、欄干で境内が取り囲まれているこの建物は、かぎ十字の形をした、めでたい太陽の車輪を表している。半球体の頂上には、三段の傘のついた尖塔を中心にすえた欄干でまわりを覆われた四角い社がある。この尖塔は世界の軸を示している。これは（「世界の山」を取り巻く）「天の丸天井」を通り抜けている。この葬儀の塚は、宇宙を超越する再生を象徴しているので、アンダ（卵）という別名がついている。

とあり、スーパーが墓であると同時に再生するための社（聖域）でもあることから、ハウルの動く城は否定的に言えば、自己充足するために退行する場ではあるが、積極的な意味では、再生するための創造的退行の為の場なのである。

ハウルは髪の色がおかしくなったというだけで、うつ状態に陥り、溶けてなくなりそうになる。ハウルは母と一体化し、母の中に溶け込みたいという欲求が強い。すなわちハウルは近親相姦的退行状態とでもいうような、人間としての汚らしい悪をその城で行おうとしている。

このようなハウルをソフィーは掃除婦としてケアする。永遠の少年のように、空を飛び、誇大性を生き、外に悪を投影して、悪者退治を試みる一方で、傷つきやすく、傷つきを癒してもらうために城に閉じこもり、あげくのはては偉大な母的存在であるソフィーに世話をしてもらおう。いわば、永遠の少年と母親との関係を彷彿とさせる。

ソフィーにとって姥皮はペルソナでもある。ユング⁴⁰⁾は個性化について「個性化とは自己を一方において、ペルソナの偽りの被いから解放することであり、他方において、無意識のさまざまなイメージの暗示的な力から解放すること」と説明し、筆者⁴¹⁾はこのことを、「冬のソナタ」において、記憶を失って偽りの自己を生きている時のミニョンはその偽りの花嫁であるチェリンと結びつき、本当の自己を取り戻したチュンサンは真の花嫁であるユジンと結びつく述べ、個性化はペルソナとソウルの双方の関係の中で進むということ論じている。

このことからすれば、ソフィーにとっての内的人格はハウルであり、老婆というペルソナを変容させるためには、自己愛障害心性を強く持つハウルをケアし、ハウルを変容させる必要があり、そのための場がハウルの動く城であると言える。

（6）死と再生とエロス

夢5「私は首だけの私を手を持ち、片方の手でそれを叩いている。肉が落ち、骨が落ちる。担任がやってきて、骨を叩く。私は担任の首を絞めて、骨をのこぎりで切り、肉を団子にする。その回りを火が囲んでいる。」

夢6「骸骨が白い着物を着て飛んでいった」

（連想）担任なんか死んだら良いのに。でも私はそう思うと胸が痛む。私は好き嫌いでスパッと切って、嫌いな友達に冷たくした。その子たちに悪いことをしたと思う。

人を見て、ぱっと判断するのは止めようと決心した。友達の悪い面を考えると骸骨の歯のような音がする。

私はこれまで自分で決めてきたけど、間違ふことばかりだった。それで訳がわからなくなって、誰かに相談したくなった。それで行動を拒否したら心配してくれると思った。だから、今が一番幸せ。

この夢を見てから夢を見なくなった。ものすごく弟とけんかする。でもこれまでは姉と弟という交わりがなかった。今は私の中に弟が生き生きしている。最近心が生き生きして

きた。文学に対する感動も増えている。詩でも次々と感情が出てきて、いくらでも考えられる。

エスキモーの昔話「クモになった女」⁴²⁾はすべての男をばかにする娘が頭だけの男性を愛し、夜な夜なベッドの中でその男と楽しくささやきあい、最後にクモに変えられてしまう物語である。すでに述べたように頭は原理・原則をあらわし、霊の住む場である。この物語は否定的アニムスに捕らわれた娘がクモのように空想にふけ、精神病様状態に陥いるという悲惨な結末を描いている。

しかし、クライアントは悪に対する態度を変えたようである。「トルーデおばさん」⁴³⁾の好奇心のままに悪についてたずねて燃やされてしまった娘と違って、「美しいワシリッサ」⁴⁴⁾のワシリッサは悪について尋ねないことでババ・ヤガから祝福された。その後、ワシリッサがババ・ヤガの小屋から立ち去る時に姉たちへの土産として渡された頭蓋骨により、姉と継母はその頭蓋骨の燃える両の目でなまれ、燃え尽きて灰になってしまう。そしてワシリッサは頭蓋骨を埋葬して町に行く。

フォンフランツ⁴⁵⁾はこの箇所に関して、次のように説明する。

ワシリッサは悪の国へ踏み込んだ後、良心の布置を変えた。ババ・ヤガのところで暮らし、悪の深淵を少しはのぞきこんだあとで、彼女の内部に自衛力が育ったのだ。これが、自分の影を見るという苦痛な作業の、プラスの稔りだ。自分の影を検閲するのは非常に辛いが、予想外のプラスの結果が得られる。

クライアントも同様に悪の深淵を少しのぞいた後、否定的アニムスの表象である頭蓋骨の持つ意味に気づき、悪に対する態度を変えたと理解できる。

この後、クライアントはこれまでずっと抱き続けてきた罪悪感とその原因について話した。その原因について言及することは差し控えるが、クライアントはその辛い思いを涙ながらに

筆者に打ち明けた。

このことと関連して、カトリン・アスパー⁴⁶⁾は次のように説明している。

自己愛の傷を負ったアナリザンドが、否定的アニムスの破壊性を理解できるのは、その背景にある抑うつを意識化し、それを子ども時代と結びつけたときだけである。しかし、この意識化は、苦痛に満ちた暗い感情への直面を伴う。こうした感情を再体験するには、ある程度の自我の強さと自尊心がなければならない。そしてさらに重要なのが、分析家に対する信頼である。この分析家なら、早期の養育者とはちがって、自分の苦しみに共感的に反応してくれるはずだと思えるときにのみ、アナリザンドは危険を冒して痛みを分かち合おうとするであろう。

「ハウルの動く城」のソフィーも荒地の魔女に老婆の姿に変えられたということを誰にも打ち明けることができなかった。ソフィーはハウルの城の中で、荒地の魔女まで加えた元型的家族を体験し、火を使って料理し、その信頼関係の中で悲しみ、怒り、苦痛を再体験し、分かち合っている。

火についてはフォンフランツ⁴⁷⁾が

火はしばしば性的な激情の象徴とみなされる。否定的な場合、焼かれることは何か抑制のない衝動性への逸脱のしるしと考えられている。この激情から人を守ってくれるのは、何よりも人間的な感情、関係性、最も深い意味でのエロスである。

と説明しているように、ハウルは元型的家族との関係の中でエロスを育て、クライアントもまた心理療法関係の中で、身を守るエロスの輪を育てたと理解できる。

筆者はソフィーが荒地の魔女の世話をし、関係を深めることはソフィーが大人の女性へと変容するために大変重要なことであると考えている。

例えば、女性の変容についてデメトラコポロス⁴⁸⁾は次のように述べている。

ハガルの変容のなかで強調されるもうひとつのことは、女には女が必要だということである。女性的なもの、母系とのつながりは、ハガルが本来の自分を取り戻し、変容するに至る最後の踏み切りのために、欠かすことのできないものである。

ところで、クライアントの心理療法全体の過程は錬金術という黒化（ニグレド）であり殺（モルティフィカティオ）であると考えられる。

エディングーは⁴⁹⁾ 殺（モルティフィカティオ）について

殺は錬金術の中でもっともネガティブな作業法である。それは、暗闇・敗北・肢体切断・死・不敗などと関連している。しかしながら、これらの暗いイメージはしばしば、最終的には極めてポジティブなイメージ成長・復活・再生などに通じる。

と説明するように、クライアントの原理・原則を象徴する頭を叩き、その頭を体から切り離す行為は死と再生を意味する。

古代エジプトの神オシリスは弟セトに殺され、体をばらばらにされたが、妻イシスに救われ、体を元通りにくっつけられて復活した。ヨハネによる福音書⁵⁰⁾に「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る」とあり、「出エジプト記」⁵¹⁾には

今月の十日、人はそれぞれ父の家ごとに、すなわち家族ごとに過ぎこしの子羊を一匹用意しなければいけない。もし、家族が小人数で子羊一匹を食べきれない場合には、隣の家族と共に、人数に見合うものを用意し、めいめいの食べる量に見合う子羊を選ばねばならない。

とあることを、エディングー⁵²⁾が、「これらのイメージの背後にある心理学的な観念は、子

どもの純粹で無垢な状態が犠牲に供されなければいけないということである。」と述べているように、クライアントの夢における死体切断は父や祖母の教えで現される社会的集合意識を無邪気に受けついで幼さを殺し、人格の多面性を受け入れる女性的意識への態度変更の為の儀式であったといえる。それゆえ、ポルターガイスト的に取りつた祖母の霊や否定的アニムスをあの世に送ることが可能になったのである。

（7）まとめ、

私たちの若い頃と違って、現代の若者は知的でかっこ良く、トレンドイダと思って臨床心理学を専攻する若者が多いそうである。しかしその反面では、ソフィーがカブ頭の案山子に導かれて、すなわち、社会の片隅に打ち捨てられた価値観や自分の人格の劣等な部分に導かれて、ハウルの城に入いったように、これまでの教育で教え込まれた価値観や受験勉強で鍛えてきた人格的側面ではなく、別の価値観や人格的側面に導かれて臨床心理学を学びにやってきた若者もまた多い。すなわち、悩むのはあとにして、立ち止まらずに、空想などするな、効率良く勉強して、分からなくても良いから暗記をして、愚図はだめ、失敗したらだめ、他人に負けるな、欠点をなおせ、等を親や教師から言われ続け、そのことに疑問を抱いた学生が、臨床心理学科にやってくるのである。

臨床心理学は悩み、立ち止まり、ゆっくり学び、空想することが大切であり、欠点が個性を作り、愚図で失敗し、負けて苦しみ、涙を流すことが心を育てるのだと考える。臨床心理学が大切にするこの価値観は社会からはだめなことと打ち捨てられている。しかし、この社会から打ち捨てられて来た価値観に心を開くことこそ人格を成熟させるということはいうまでもない。

ソフィーは父親の営んでいた帽子屋を継いでいた。すなわち、父親の価値観、考え方を受け継いで、それを守って生きてきたのである。しかし、ハウルに出会ったことで淡い恋心を抱き、そのことにより、ソフィーは家から出ざるをえなくなる。

家を出ることは父親の精神性からの分離を試みることを意味する。しかし、変容の時は心の危機の時でもある。ソフィーは、ハウルの心臓を所有することを欲している荒地の魔女の嫉妬を買い、荒地の魔女に魔法をかけられ老婆にされる。ソフィーは母親との関係が薄い故に、大きな変容をなさねばならない危機的な時期に、一旦老婆という長期間かけて人生を生き抜いてきた確固たる女性像の衣をまとわされる。魔法をかけられ、しわくちやの老婆という一見否定的な姿ではあるが、片方ではゆるぎない最高の女性像の衣に守られ、さなぎの時期を抑うつや悲しみ、怒りを体験しつつ過し、大人の女性へと変容するのである。

クライアントもまた父の精神性を受け継ぎ、亡き祖母の父性的精神像（アニムス）ともいうべき霊に守られ、取り付かれもした。クライアントは苦しい変容の作業を行う過程で、父性的精神像から分離し、まだこの世に未練のある祖母の霊をあの世に送ることができた。

思春期から青年期への変化は大きな変化の時である。変容するためには親の守りが必要であり、母との関係の薄い女性は確固たる女性像の現れである老婆に出会う必要がある。

生真面目で、毎日毎日授業に出て、一番前で講義を聞き、少し古びた道徳感情を抱き、男女関係にも臆病で、服装も地味な女子学生。それは老婆という衣を着て、大人の女性へと変容する準備をしているとも言える。

心理的援助専門職者はこのような女性たちが変容するのをゆっくりと見守る必要がある。

引用文献

- 1) Christopher Hauke and Ian Alistair, Jung and Film, Brunner-Routledge, 2001
- 2) 宮崎駿監督、『千と千尋の神隠し』、スタジオジブリ、2001
- 3) 宮崎駿監督、『ハウルの動く城』、スタジオジブリ、2004
- 4) グリム童話集、『まっしろ白鳥』（KHM 46）金田鬼一訳、岩波書店、P57-63、1980
- 5) エンマ・ユング、『内なる異性』、笠原嘉・吉本千鶴子訳、海鳴社、P31、1976
- 6) 老松克博、『無意識と出会う』、トランスビュー、P65、2004
- 7) ビルクホイザー・オエリ、『おとぎ話における母』、氏原寛訳、人文書院、P156、1985
- 8) グリム童話集、『トルーデさん』（KHM 43）金田鬼一訳、岩波書店、P33-37、1980
- 9) フォン・フランツ、『メルヘンと女性心理』、秋山さと子・野村美紀子訳、海鳴社、P193、1979
- 10) ステファニー・デメトラコポウリス、『からだの声に耳をすますと』、横山貞子訳、思想の科学社、P232、1987
- 11) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女性心理』、P213
- 12) 宮崎駿監督、『魔女の宅急便』、スタジオジブリ、1989
- 13) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女性心理』、P158-164
- 14) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女性心理』、P166
- 15) 織田尚生、『心理療法と日本人の心』、培風館、P28、2005
- 16) 山中康裕、『ハリーと千尋世代の子どもたち』、朝日出版社、P26、2002
- 17) 山中康裕、『ハリーと千尋世代の子どもたち』、朝日出版社、P54、2002
- 18) クリスティアーネ・ルッツ、『子どもと悪』、野村美紀子訳、晶文社、P115、1985
- 19) 山中康裕、前掲書、『心理療法と日本人の心』、P30
- 20) 河合隼雄、『子どもの宇宙』、岩波書店、P162、1995
- 21) エリック・ノイマン、『アモールとプシケー』、河合隼雄監修、紀伊国屋書店、P3-59、1975
- 22) ユン・ソクホ監督、『冬のソナタ』、NHKエンタープライズ、2003
- 23) 老松克博、『元型的イメージとの対話』、トランスビュー、P186、2004
- 24) 関敬吾、『日本昔話大成2』、角川書店、P16、1987
- 25) 織田尚生、『昔話と夢分析』、創元社、P102、1993
- 26) カール・アルフレッド・マイヤー、『ソウル・アンド・ボディ』、法蔵館、P116、1989
- 27) 『イザヤ書』45章7、新共同訳、日本聖書協会、1990
- 28) ゲーゲンビュールクレイグ、『心理療法の光と影』、樋口和彦・安溪真一訳、創元社、P116、1981
- 29) 今井暁式・今井章子、『夢とおとぎ話における母親援助の実際』、三晃書房、P60、1996

- 30) バーバラ・ハナー、『アクティブ・イメージ
ネーションの世界』、老松克博・角門善宏
訳、P32-33, 創元社、2000
- 31) ベヴァリー・ムーン編、『元型と象徴の辞
典』、橋本填矩代表訳、青土社、P28, 1998
- 32) ジェームス・ヒルマン、『内的世界への探
求』、樋口和彦・武田憲道訳、創元社、P
32, 1990
- 33) フォン・フランツ、『おとぎ話における
悪』、人文書院、P66, 1981
- 34) ベヴァリー・ムーン編、前掲書、元型と象徴
の辞典、P244
- 35) カール・グスタフ・ユング、『心理学と錬金
術』、池田紘一・鎌田道生訳、人文書院、P
99, 1999
- 36) エディングガー、『心の解剖学』、岸本寛史・
山愛美訳、新曜社、P27, 2004
- 37) 河合隼雄、『日本人のこころ』、NHK市民
大学講座テキスト、日本放送出版協会、p
96, 1983
- 38) ダイアナ・ウイン・ジョンズ、『魔法使いハ
ウルと火の悪魔』、西村醇子訳、徳間書店、
P24-25, 2005
- 39) ベヴァリー・ムーン編、前掲書、『元型と象
徴の辞典』、P244
- 40) Jung,C,G The relations between the ego and the
unconscious,Volume 7 of the Collected Works of
C.G.Jung,P174,1928
- 41) 拙論、「冬のソナタの深層心理学」、京都文
教大学心理臨床センター紀要7号、
P97, 2005
- 42) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女
性心理』、P114
- 43) グリム童話集、前掲書、『トルーデさん』
(KHM43)
- 44) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女
性心理』、P207
- 45) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女
性心理』、P207
- 46) カトリン・アスパー、『自己愛障害の臨
床』、老松克博訳、創元社、P182, 2001
- 47) フォン・フランツ、前掲書、『メルヘンと女
性心理』、P157-158
- 48) ステファニー・デメトラコポウルス、前掲書
『からだの声に耳をすますと』、P134
- 49) エディングガー、前掲書『心の解剖学』、P180
- 50) 『ヨハネの福音書』12章24-25、新共同訳、
日本聖書協会、1990
- 51) 『出エジプト記』、12章3-4、新共同訳、
日本聖書協会、1990
- 52) エディングガー、前掲書『心の解剖学』、P180

Abstract

An Old Woman Image in Adolescence Crisis and “Evil-Sexuality”

I compared a transformation process of a girl who is possessed by the ghost of late grandmother, with the transformation process of Sophie who is the heroin of “the castle moved of a Howl” who was changed into a figure of an old woman by the magic of a witch.

An adolescence crisis is a crisis for transformation. An adolescent girl must be protected by parent. However, it is necessary for the girl whose connection with mother is poor to meet the old woman who is a complete image for women.

They experience sorrow and anger in the defense of an old woman, and transform to adults.

Keywords: A ghost of an old woman, sanctuary, transformation